カラカネイトトンボの生息地・篠路福移湿原再生の取り組み

日本湿地学会2015年度大会（上智大学）発表

＊石橋佳明（ＮＰＯ法人カラカネイトトンボを守る会）　新庄 久尚（株式会社エコテック）　古村えり子（北海道教育大学）　綿路昌史（ＮＰＯ法人カラカネイトトンボを守る会）　木村浩二（雪印種苗株式会社）

背景と目的

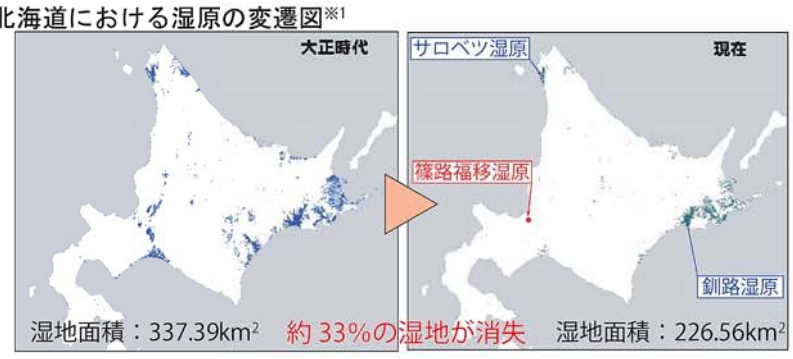
北海道の石狩川下流域にはかつて総面積55,000haとなる日本最大の湿原が拡がっていた。石狩湿原は美唄、幌向、当別篠津、対雁など複数地域の泥炭地の集合体であり、湿原生のスゲ類やミズゴケ類などが優占する広大なボッグを形成していた。

明治以降の開発や、1950～1960年代の農地開発や治水事業に伴い、石狩川流域は日本最大の穀倉地帯へと変貌したが、その一方でかつて存在していた広大な湿原はほぼ消滅し、1983年には石狩平野に残存する湿原植生は119 haとかつての0.2%にまで激減した。現在では美唄湿原や月ヶ湖湿原などに孤立したわずかな湿原植生が残るのみとなっており、これらの残存する湿原も地下水位の低下等による乾燥化が進行するなど、今後の存続が危ぶまれている。

篠路福移湿原は美唄湿原などと同様、かつての石狩湿原の植生や景観が残されている希少なボッグのひとつである。市街地に近接した立地であるにもかかわらず、ホロムイスゲなど湿原生のスゲ類やミズゴケ属の群落が残されているほか、準絶滅危惧種である「カラカネイトトンボ」が生息するなど、その重要性、希少性が指摘されてきている。

しかし近年では周辺の埋め立てなどによって湿原面積が20haから5haへと縮小するなど、湿原の消失、劣化が進行している。そこで、現在篠路福移湿原の保全、再生に向けた取り組みが市民団体や拓北高校理科研究部（2014年度閉校：現在は旭丘高校生物部が活動継続）などによって実施されている。

北海道における湿原の変遷図※1

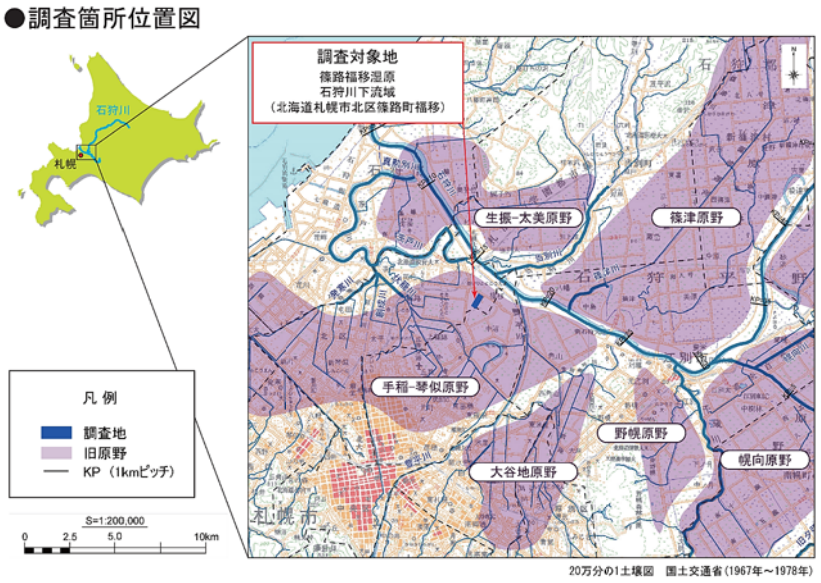


■石狩平野には、総面積 55,000ha となる北海道最大のボッグが形成されていた※2
■1983 年石狩平野に残存する湿原植生は 119ha(かつての 0.2%) のみ
現在は美唄湿原や月ヶ湖湿原などにわずかなボッグが残るのみとなっている

※1：国土地理院 第四紀湿原調査結果 HP　2000
※2：北海道東開発泥炭地調査報告　北海道開発庁　1963

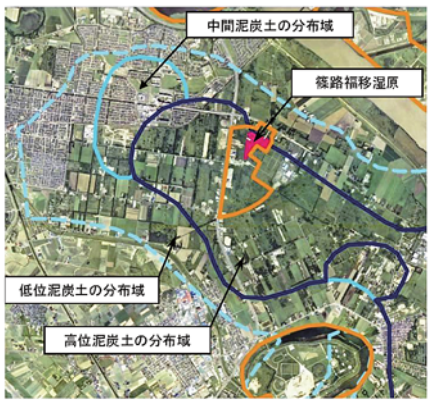
調査地の成り立ち

●調査箇所位置図



20万分の1土壌図　国土交通省（1967年～1978年）

●篠路福移湿原とボッグ（手稲・琴似原野）



- かつての石狩川下流域に存在したボッグ（ミズゴケ湿原）に由来する高位泥炭土の分布域に成立する
- 市街地近郊にありながら現在もミズゴケ群落が残存
- そのため、小面積でありながらボッグに生息する様々な生物の成育・生息が確認されている

生息・生育を確認した湿原の生物

ミズゴケ属群落

カラカネイトトンボ

ゴマシジミ

ワタスゲ

ムジナスゲ

ホロムイリンドウ

取り組みの経過

	湿原の遷移	当会の活動	調査研究・保全活動
1978年～	あいの里ニュータウン計画による宅地開発が進められる		
1996年～			札幌拓北高校理科研究部による湿原のトンボ調査が開始。札幌市では確認されていないカラカネイトトンボを発見。研究成果を地域の祭りなどで発表・報告。
1997年		理科研究部の活動がきっかけで自然保護団体「カラカネイトトンボを守る会」が設立	
2001年	湿原周囲から大規模な埋立が進行。40haほどの面積が5ha以下に激減。		埋め立て前線の湿原の生物を救うため茨戸川河川敷にビオトープを設立（とんぼの学校）
2002年		市長に対し「湿原公園」として保存を要請するも承認されず	
2004年		NPO法人化への組織作りを開始 地権者に対し湿原保存活動への協力要請文を発送	
2005年～		NPO法人として登記 ナショナルトラスト運動開始	
2006年～	埋め立ての影響で土壌が隆起。乾燥化による植生の変化や地盤のひび割れが発生		埋め立てによる環境の変化を確かめる調査を実施。
2007年～	草原性植物が進出し湿原特有の植物が減少		JRあいの里教育大駅や札幌駅などでパネル展を開催。
2011年	管理地の一部が埋立ての被害に遭う。	残土受入事業差止等請求事件として埋立て業者に対し提訴裁判を行う。現在も進行中。	
2012年			
2013年			湿原性植物の種採集
2015年	現在7456m²の土地を会で管理	札幌市の認定を受け「認定NPO法人」となる 北海道札幌拓北高校閉校	北海道教育大学の温室で育てた苗をビオトープへ移植

現在に至る

現在の保全・再生に向けた取り組み

ＰＲ活動

活動を行っていく上で、地域住民をはじめとした様々な人にこの湿原の存在と価値をわかっていただかなければならないと考え、ＨＰによる活動紹介のほか、ＪＲ札幌駅やあいの里教育大駅などにおいて、ポスターの展示や生き物の写真展、高校生による研究活動報告などのＰＲ活動を展開している。さらに、7月には湿原観察会なども行い実際に現地へ赴き、埋め立ての進む中でもたくましく生きるカラカネイトトンボをはじめとした湿原の生物たちをみて、湿原環境の重要性を知ってもらう機会としている。

夏の観察会の様子

自然再生に向けた取り組み

・ビオトープ「とんぼの学校」

篠路福移湿原が急速に埋め立てられたことによって、埋め立て前線に生息していた生物たちの生息場所がなくなってしまうと考え、2001年に湿原から 2 キロほど離れた茨戸川の河川敷にビオトープを設立した。造成後は 5 月から 7 月までの 3 回にわたり述べ 280 人が参加し、エゾホトケやエゾトミヨ、水生昆虫、ヤチヤナギなどの救出活動を行った。2002 年に「とんぼの学校」と命名し、以後年 2 回、大勢の参加者を募りビオトープの整備を行いながら、茨戸川での川遊びやカヌー体験なども行い、地域住民とともに自然について学び楽しみながら親睦を深めている。2006 年には人工的にカワセミの営巣場所を作り、以後毎年繁殖に成功している。

カワセミの営巣場所整備

茨戸川でカヌー体験

・湿原植物の育成・植栽

2013 年 9 月より、篠路福移湿原にて湿性植物の種とりを行い、育苗する活動を 2013 年より北海道教育大学の温室にて開始した（北海道教育大学から費用の一部を地域貢献費として補助）。市民団体や地域住民との協働で無事に人工育成が成功し、育った苗をビオトープに植栽するなど、湿原植物種の保全に向けた試みを行っている。今後、育てた苗を篠路篠路湿原に移植できるよう、湿原環境の保全とともに行っていきたい。

ビオトープに湿性植物を移植

子どもたちも植栽に参加

ナショナルトラスト運動

2001年から埋め立てが進められて以降、埋め立て業者や行政に対して様々な交渉を行ってきたが、なかなか解決には至らなかった。このままでは湿原でしか生きられない生き物たちの住みかが消えてしまう、少しでも湿原環境を保全したいという想いから2004年よりNPO法人としてナショナルトラスト運動をを開始した。地権者の方との交渉や寄付金により、現在は7,486㎡の土地を管理している。さらに2010年から埋め立て業者に対し「残土受入差止等請求事件」として提訴し、湿原を保全する活動を進めている。2014年に判決が下されたが請求内容の「残土受入禁止と損害賠償請求」などは認められず、現在も訴訟は継続している。
今後もナショナルトラスト運動による土地の買い取りを行うことで、埋め立てに対する抵抗と湿原環境の保全・復元活動を行っていきたい。そのためには、多くの方々の理解と協力が不可欠である。

美しい姿の残る湿原

埋め立ての残土が迫る

壊された管理地の看板

参考資料：平成25年度施行　千歳川江別太地区遊水地外環境調査検討業務 報告書（北海道開発局 札幌開発建設部 江別河川事務所）